

一字書課題 (4月22日締切)

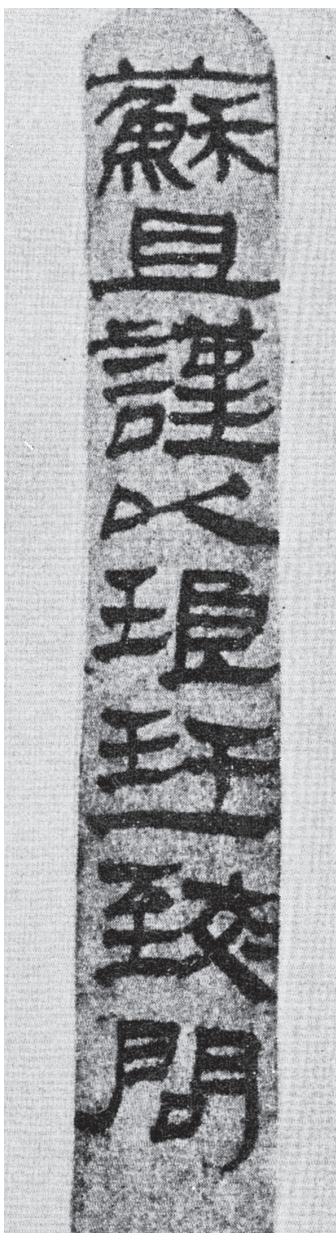
- (1) 書体自由 (2) 半紙タテ
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
- (4) 出品料 四四〇円
- (5) バーコード券の余白に「一字書」と記入

乾

条幅随意参考

蘇且謹以琅玕一致問

※抜粋可。条幅は一枚目無料、二枚目から五五〇円。半紙随意部(無料)にも出せます。条幅部に出品する場合はバーコード券余白に「条臨」と記入。

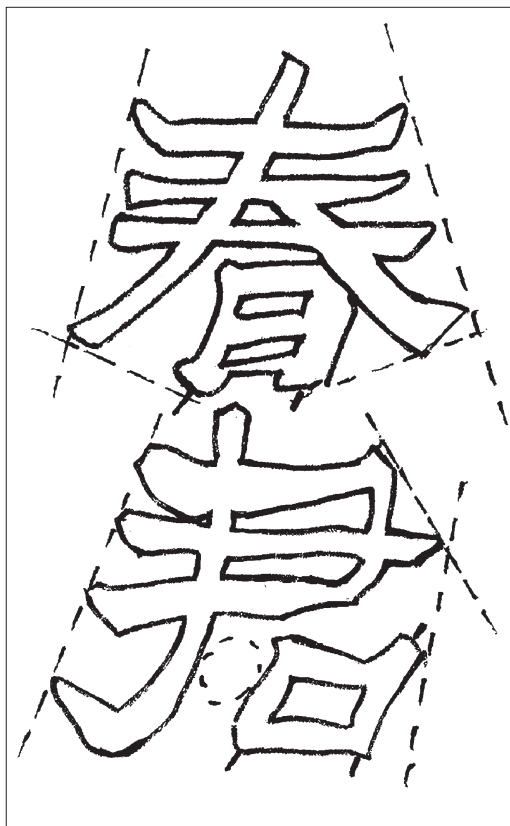


高橋香樹会長担当 半紙臨書課題

(4月22日締切) 出品料440円

木簡(漢代)

第一回
1、字句「春君」



2、形式「半紙タテ使用。中央に臨書し、左余白に落款「〇〇臨」と調和を工夫し書き入れる。

3、概観「今回から「木簡」を取りあげることにします。私は、漢字の条幅作品では、おもに「破体書」を書いていきます。「破体書」とは、

いろいろな書体で書くことです。実際にやってみると、楷書と隷書は仲々取り入れにくく苦労します。ところで、「木簡」は時代的

には隷書の時代ですが、五体全て見ることが出来ます。そこで、「木簡」を取り入れてみると、少し幅が広がったような気がしま

す。私も改めて「木簡」の勉強がしたくなり、今回、「木簡」を課題とすることにしました。

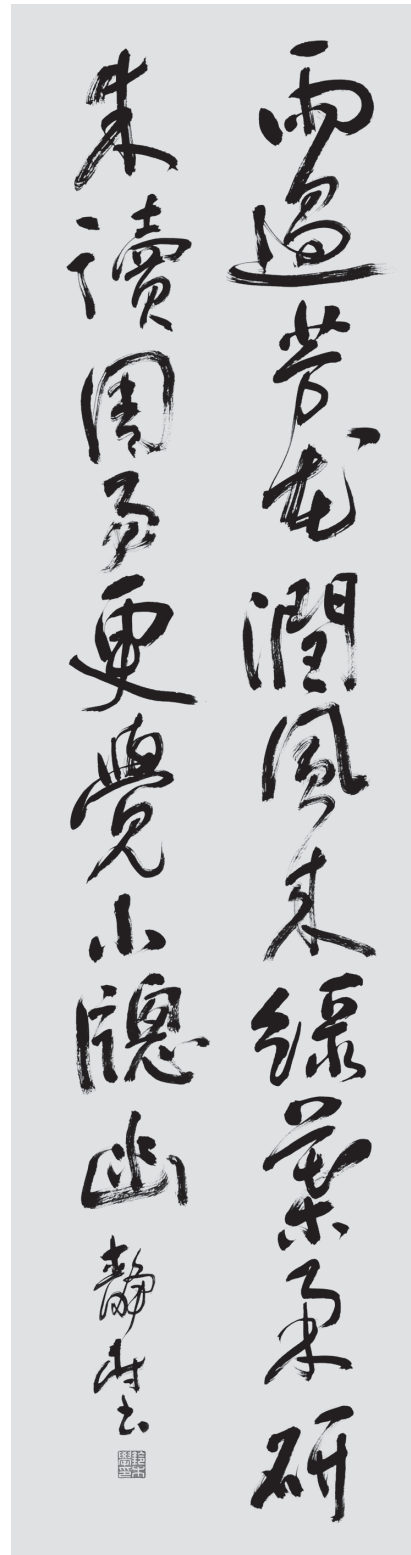
4、各字のポイント

春 基本的に起筆は蔵鋒で。横画は稍反りながら、四画目は収筆で筆を引き上げ気味に。五画目は直線。「日」は縦画左に。

君 縦横画共に起筆でしっかり筆を突く。一画目は収筆で引き上げ、二画目は真横に運筆。四画目収筆で筆の面を変え、上に引き上げる。「口」の縦画は、やはり左に。

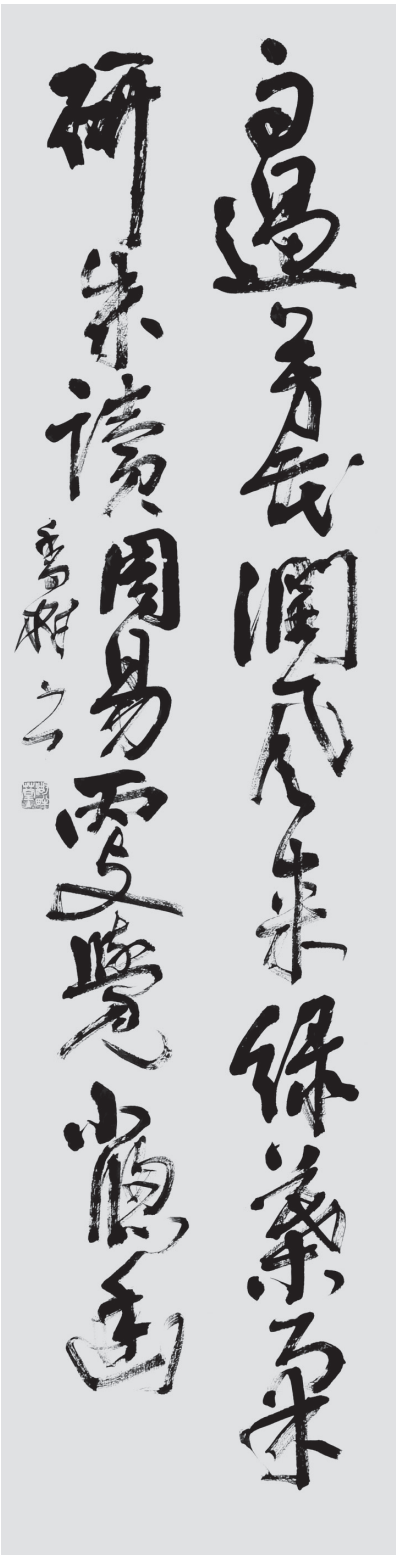
A 鈴木静村先生書

雨過芳花潤 風來綠葉柔 研朱讀周易 更覺小窓幽 (錢鳳綸)
雨過ぎて芳花潤い、風来りて緑葉柔かなり。朱を研りて周易を読めば、更に小窓の幽なるを覚ゆ。



B 高橋香樹会長書

20文字二行書き、右行は11文字前後、タテへの流れを作りつつ、流れの中に、どこかひっかかりを。書では滞りの「味」である。作品は滑らか過ぎず、滞り過ぎず。雨過 連綿「過」に字幅。潤風来 渴筆でいねいに。緑 墨継ぎ、葉柔研 少々細線で変化。朱読周易 渴筆慎重に、線に工夫を。更 墨継ぎ、臆 字体多い。字典で調査引用を。



今回は二十字の課題。行書を中心にし、連綿線を多用し制作しました。本来は、一行目十一字、二行目九字にすべきところでしたが、十字ずつとし、小字を効果的に使わなければなりません。仲々難しい。「臆」は、他に「箇・窓・窓」があります。墨継ぎは「緑」と「周」。

訳：雨が通りすぎて花の香は潤い、風が吹くと緑の葉は柔らか。朱墨をすって「周易」を読んでいると、小さな窓はさらにひっそりと感じられる。

予告 (五月二十二日締切)

太平時節難身遇

郎署何須歎二毛 (韓愈)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条漢を○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条漢を○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

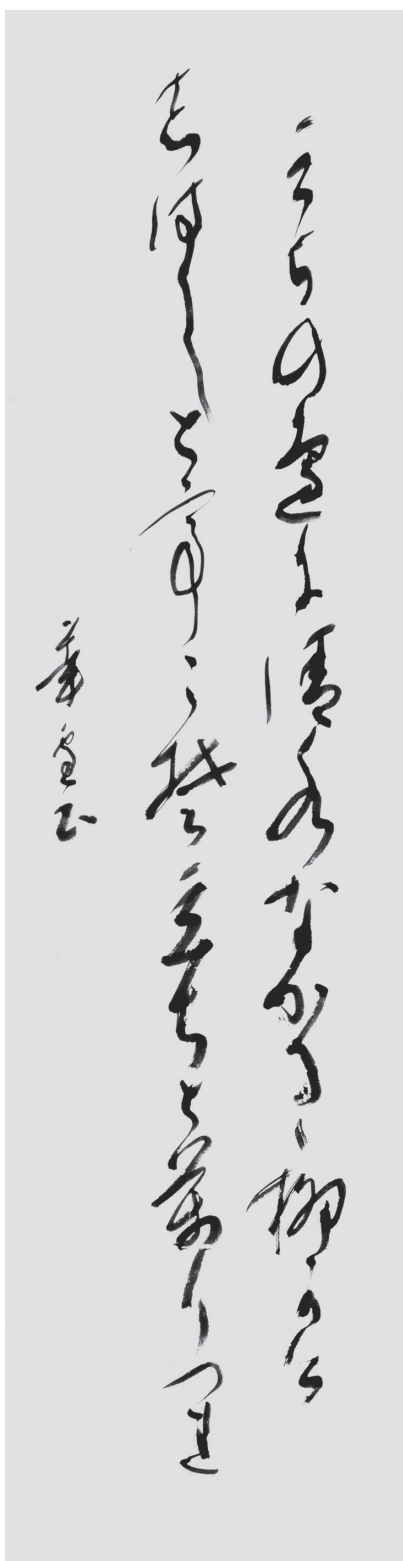
条幅部かな課題参考

(四月二十二日締切)

A

平岡華雪先生書

道のべに清水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ (新古今和歌集 西行法師)
 三ちの邊ル清水なかるゝ柳可介志はしと亭こ楚立ちと萬りつ連



B

森多富先生書

三遅の遍二清水奈か流ゝ柳可介志者しとてこ楚立ち登万利つ連



学び方

この歌は、柳の木の下でしばし休んでいる情景が浮かびます。その情景を思い浮かべて書いてみました。三行書きにし、紙面下方に三行が収束するような布置の構成です。淡墨で、二行目上の「柳かげ…」を一気に書き抜き、後半は、渴筆で変化をつけました。紙は羅紋箋で、墨をよく吸うので、運筆の速度や、筆の開閉に気を遣いました。道具も様々ありますから、皆さんも是非色々試してみてください。

西行法師（一一一八～一一九〇）平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した歌人。武士であった西行（俗名・佐藤義清）は、若くして出家し、東は陸奥から西は四国九州まで至り、ほとんど全国を歩いたといってもよいくらい旅をし、各地で歌を詠んでいる。新古今和歌集には九十四首も西行の歌が入っており、個人の歌としては一番多く取り上げられている。自然を愛し、特に月と花に関する歌を多く詠んでいることから、月と花の歌人とも言われた。

予告

(五月二十二日締切)

つゝじ咲く苔のかよひぢ春ふかみ日かげをわけていづる山びと (藤原定家)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点（バーコード券の条かを○で囲み（１）と記入する。）
 - ・二枚目からの出品（バーコード券の条かを○で囲み（ ）に何枚目か数字を記入する。出品料550円）

条幅部 随意参考

小森谷 爽風先生書

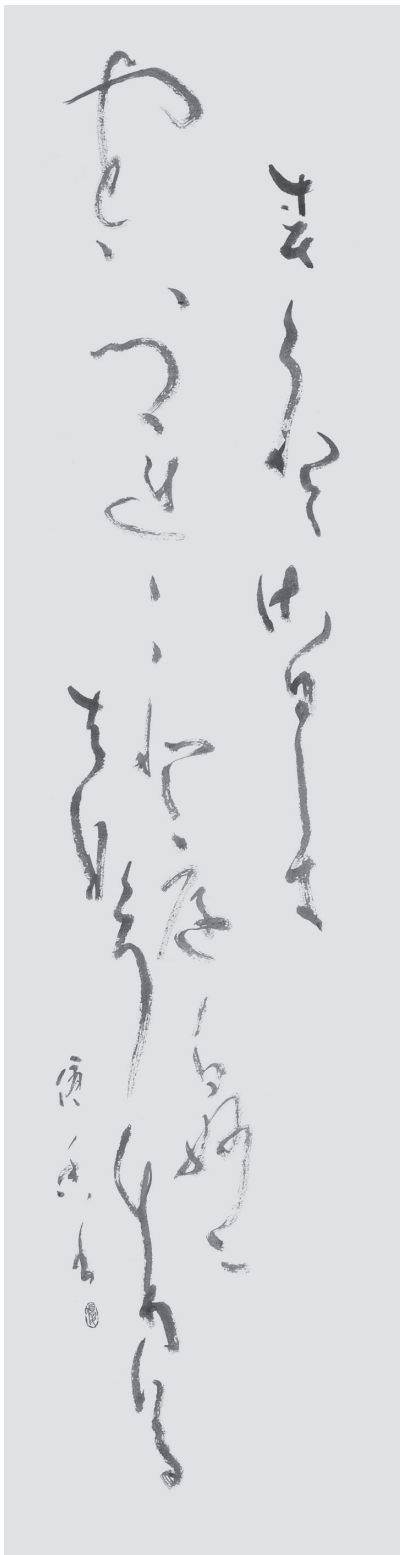
鶯邊日暖如人語（唐庚）
おうへんひあたたじんごごと
鶯辺日暖かに人語の如し。



訳…うぐいすの鳴く辺は日気暖かに人の語るが如く想われる。

本澤 優香先生書

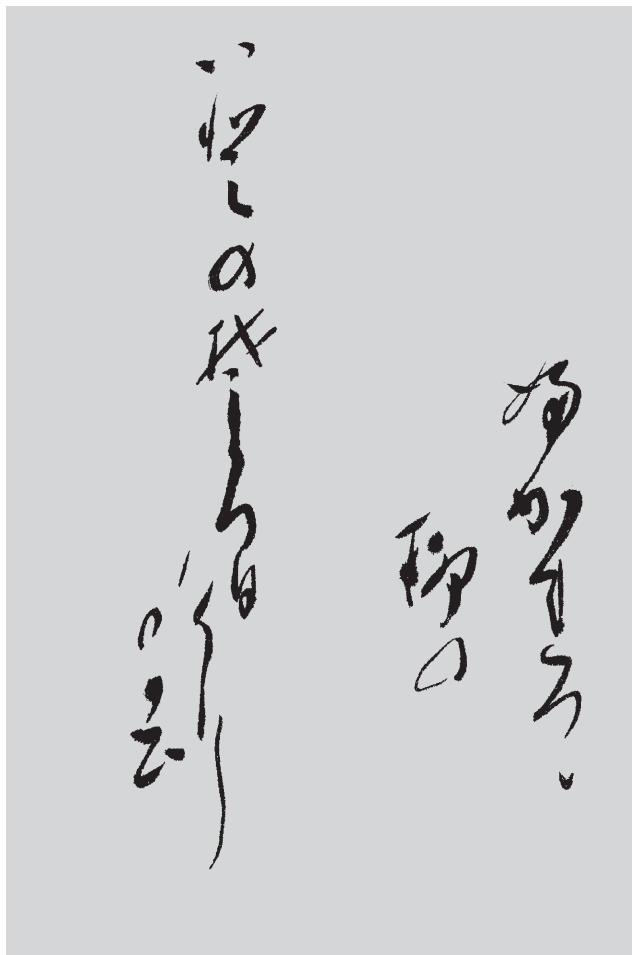
春^{はる}くれてさびしき宿^{やど}はつれづれと庭白妙^{にはしらたへ}に花ぞ散りける（凡河内躬恒）
春久禮^{はるく}て佐日^{さひ}し支^さやと八川^{はつ}連々^{つれ}、登庭白妙^と二者^{には}那曾^{なそ}千利^{ちり}介^ける



歌意…春もおわりになって、ものさびしいわが家の庭は、所在なく桜の花が白く散りしいている。

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点（バーコード券の条随を○で囲み（1）と記入する。）
 - ・二枚目からの出品（バーコード券の条随を○で囲み（ ）に何枚目か数字を記入する。出品料550円）

かな部課題参考 (四月二十二日締切)



(五月二十二日締切)

白々と花かとまがふ新樹あり (虚子)

平岡華雪先生書
ふかれつゝ柳の絲のそろひけり (きみ子)
婦か連つゝ柳のい登の楚ろ日介り

右群、二行共行末は軽く、特に一行目は踊り字をサラッと表出させたい。
墨継ぎは「楚」字でアクセント、稍強めて「介り」を寄せ、「り」の末画は長く効果的に。

漢字部課題参考 (四月二十二日締切)

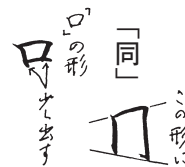


(五月二十二日締切)

柳枝経雨重 (張謂)

平岡華雪先生書
和光同塵 (老子)
訳：己の知恵の力を和らげ、世俗の塵に同化していく。

この課題は、右払い、之繞の字がないので、暢びやかに運筆できる。四字全体、大きく見せるように心がけてほしい。



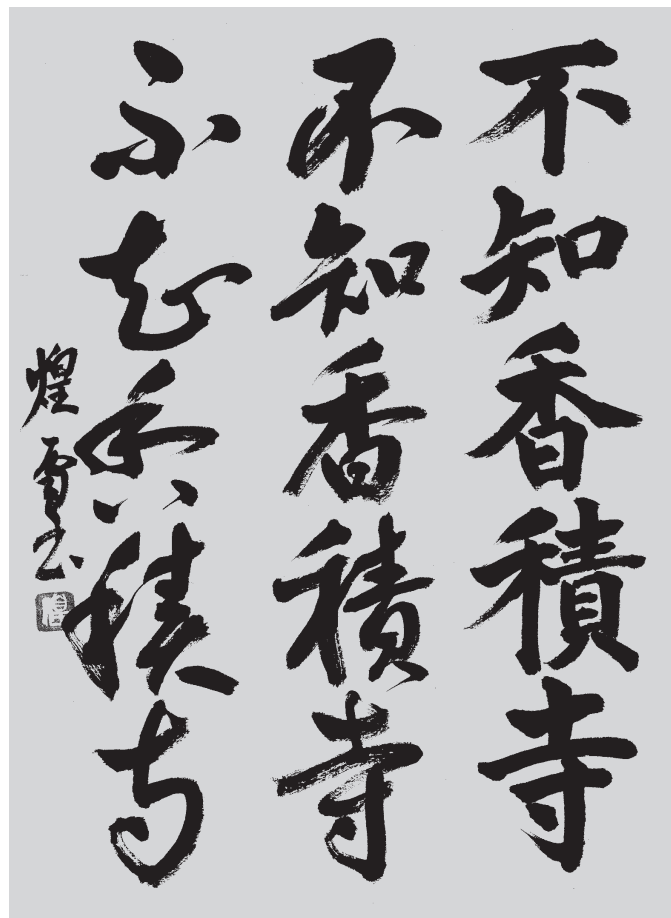
(4)

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に①～④を記入し、作品左隅に貼付の上、出品して下さい。一般会員は無料、会員外出品料は460円。

①出品部門(例：「漢字部」「かな部」) ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

楷、行、草、三体課題参考（四月二十二日締切）

漢字かな交じりの書課題参考（四月二十二日締切）

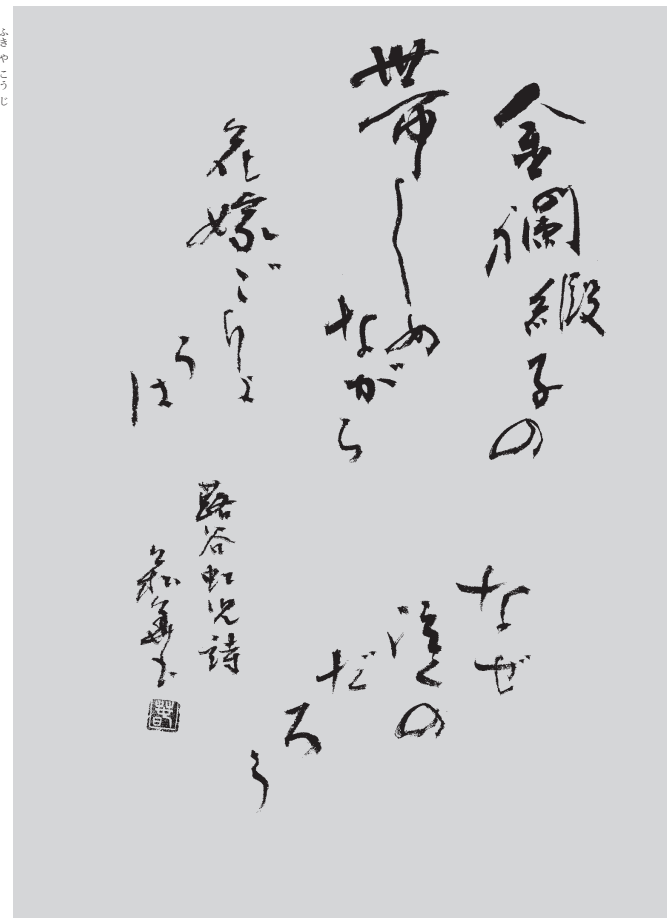


星野煌雪先生書

不知香積寺（王維）

知らず 香積寺

落谷虹児（一八九八—一九七九）新潟出身。抒情画家、作詞家、挿絵画家。大正から昭和にかけて少女雑誌の挿絵の分野で絶大な人気を得た。代表作の「花嫁人形」は、若くして亡くなった母がモデルとされる。物悲しいメロディが歌詞と一致する。今回は上下二段構成とし、上段の漢字をやや崩した行書にして、やさしい感じに表出してみました。



小暮菰華先生書

金襴緞子の帯しめながら花嫁ごりようはなぜ泣くのだろう

「花嫁人形」落谷虹児

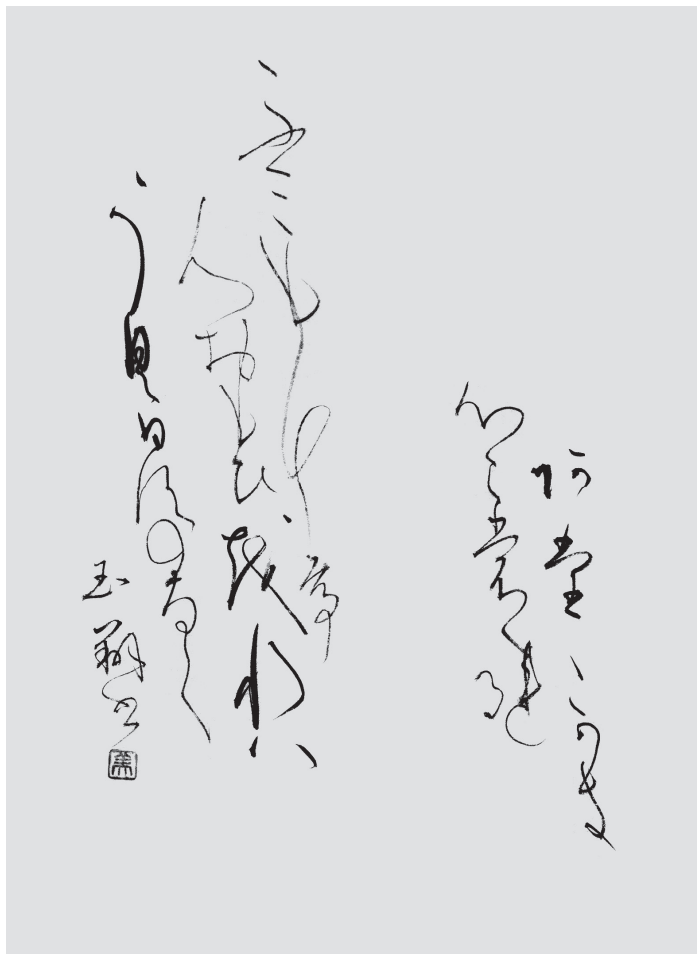
(5)

(1)随意部参考として出品してください。(2)会員外の出品料は460円。

(1)出品料550円 (2)バーコード券余白に「漢か」と記入

随意部参考

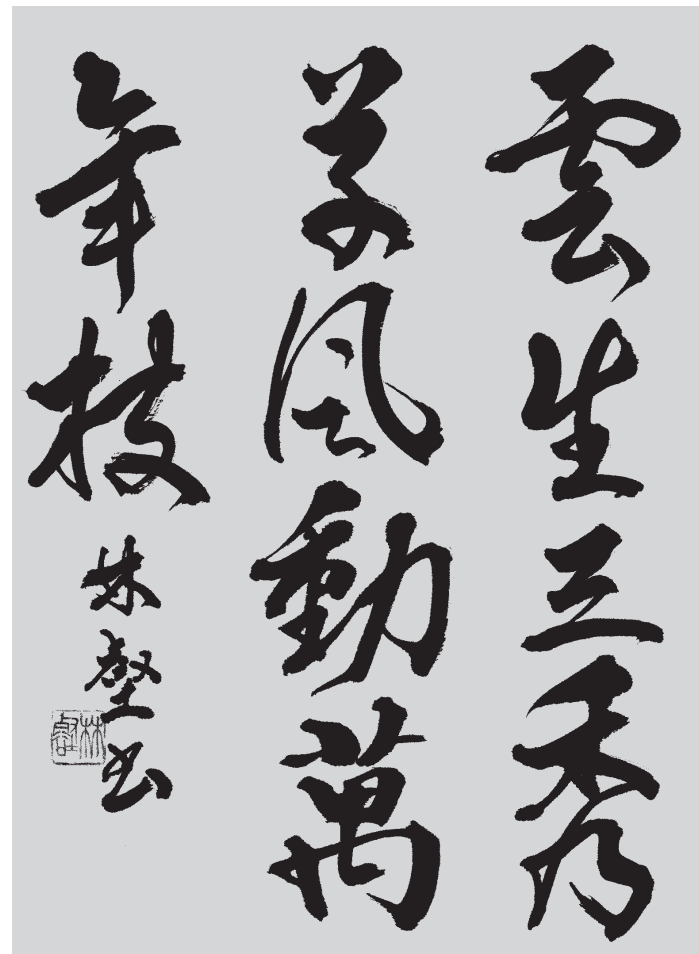
歌意：あたたかい心のこもった手紙を手にして、この手紙をくださった人のことを思っていると、折しも鶯の鳴く音が聞こえたことだ。



福田玉翔先生書

訳：雲は年に三たび秀いずる靈草に生じ、風は吹いて万年の枝（青木）を動かすのである。
 あたたかき心こもれるふみ持ちて人思ひ居れば鶯のなく（伊藤左千夫）
 阿堂、可支心こ裳連るふ三も千亭人おもひ越れ八う具日須の奈久

随意部参考



高山林壑先生書

雲生三秀草。風動万年枝。（陳肅）
 雲は生ず三秀の草、風は動く万年の枝。

硬筆部課題参考

(四月二十二日締切)

赤木典子先生書

石原春香先生書

課題 2 (初段階以下)

課題 1 (初段階以上)

子供の頃の記憶とそうものは、なぜか強靱な生命力を持ち、いつまでもその鮮やかさを失わない。

桃山から宇治あたりの、竹藪や茶畑や柿の木が多い、あのゆるやかな斜面は、いかにも平和ないい気分を持っている。

課題 1 (初段階以上)

桃山から宇治あたりの、竹藪や茶畑や柿の木が多い、あのゆるやかな斜面は、いかにも平和ないい気分を持っている。

『古寺巡礼』和辻哲郎

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン (黒色) を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入 (色は黒) はじめて出品される方は私製の紙 (3×4 cm 位) 次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (4) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題 2 (初段階以下)

子供の頃の記憶というものは、なぜか強靱な生命力を持ち、いつまでもその鮮やかさを失わない。

『昼の目と夜の耳』黒井千次